

[23] 死と相対する…

モーリス・ベジャール振付 『M』

1993年8月25日 東京新聞 夕刊6

モーリス・ベジャールが東京バレエ団のために『M』という新作を振り付けると聞いたとき、この一文字が何を意味するのか、頭をひねったものだった。折しも彼の秘蔵の弟子ジョルジュ・ドンが亡くなって、Mはフランス語のモール、つまり死に違いないと、私は思った。旺盛な創作欲を誇るベジャールも、齢六十をとうに越えている。人生を振り返り、死に思いを向けたとしてもふしぎはない。

ところがMは三島由紀夫だという。意匠を凝らした文学を展開した、あの三島。それを舞台化したようなのだろうか。どこか腑に落ちない気がしたのも事実である。

だがその『M』の初演（7月31日）を見て、ことはさほど単純でないことが分かった。

ベジャールがこのバレエで描こうとしたのは、必ずしも三島の作品ではないし、また彼の人生でもない。言うならば、作品と人生の彼方に透いてみえる哲学と美学である。それをベジャール自身が感じとった近代の日本に重ね合わせて、自己の表現にしようとしたのだ。これはまさしくベジャールが最も得意とする手法である。

ダンサーが体現するのは人物ではなく、抽象的な理念、もしくはイメージである。そういうわけで、「彼」と目されるある主体を四人の男性舞踊手に仮託するのだが、その一人一人は、言葉、精神、肉体、行動（＝死）を表している。四人はそれぞれにソロを踊ることもあるが、それよりも同時に動いて一個の自我の分裂と統合を印象づける。

* * *

舞踊的に見て私が深い感銘を受けたのは、ベジャールが日本人独特の表現を見事に生かした点であった。

[23] 死と相對する…

モーリス・ベジャール振付 『M』

1993年8月25日 東京新聞 夕刊6

絵画でも演劇でも文学でも、日本人の芸術表現はなべて心理が内に籠もり、良く言えば繊細で深みがあるのだが、しかしどこか生硬で、あふれるような躍動感に欠けるきらいがある。舞踊は特にその傾向が強く、最近の日本のバレエはテクニクは抜群だが、個性的な感情表現となると引けを取る。下手くそでも西欧の王子様のほうが良い雰囲気を発散するのである。

ところがベジャールは、このような欠点を逆手にとって、まさに日本人ならではの清冽な動きを引き出した。

たとえば、「彼」の四番目の「行動Ⅱ死」を踊った小林十市。ベジャールの手勢であるルードラ・ベジャール・ローザンヌで活躍中で、今回は三年ぶりの里帰り客演だが、その銜いのない切れの良さで胸のすく思いをさせる。まるで朝日を浴びた石の庭のように、さわやかで潔い。

それに対して、聖セバスチャンを踊った東京バレエ団の首藤康之は、もはやまざれもないベジャール・ダンサーである。張りつめた若々しい筋肉がしなやかに彫り上げる肉体造型は、ベジャール・バレエの究極の美だ。そしてまた作家三島が飽くことなく描きつづけた理想でもあった。

もちろん舞台には、三島の人生と作品に関連するイメージが入れ代わり立ち代わり出現する。学習院の制服を着た少年と白髪の老女、男女とりどりの組み合わせで踊られる禁じられた愛のパ・ド・ドウ、その三重奏。鹿鳴館の舞踏会から、金閣寺の炎上、果ては軍服を着て桜の枝を手にした男性群舞まで。

— その一つ一つに、三島の小説のディテールをあてはめて謎解きをするのも楽しいのだが、しかし、そ

[23] 死と相対する…

モーリス・ベジャール振付 『M』

1993年8月25日 東京新聞 夕刊6

んなことはおかまいなしに、ベジャールという舞台の魔術師が次から次へと繰り広げる動く絵巻物を、陶をとどろかせて見ているだけでも、幕間なしの一时间半はあつという間に過ぎてしまう。

こうして、能の雛子を思わせる黛敏郎の音楽や、リヒャルト・シュトラウス、ドビュッシー、サティ、ワーグナー、シャンソンなどに合わせて、日本と西洋が絶妙に交錯する舞台空間の出現となったわけだが、それは奇妙にも三島の文学と裏おもてで符合する世界だった。

というのも、もっぱら思考と言語という精神的手段を駆使しつつ肉体と行動に憧れつつけたのが三島という作家であったとすれば、肉体と行動で表現しながら、その彼方で哲学と思想を語るのがベジャールという振付家だからである。レトリックをあやつる三島の文章は日奎文化の土壌の上に西洋理念の実現をもくろみ、ベジャールはバレエ・テクニクの限りをつくして日本人ダンサーという素材をあやつったのだ。

潮騒で開けた舞台は、始めと同じ青い海のコール・ド・バレエで終幕となり、変容と輪廻、そして帰の輪は閉ざされた。

このバレエはやはり死を主題とするものだった。舞台の脇に置かれた緑色のボードに、大きな「死」の文字が一画ずつ書かれていくことから、それは明らかなのだが、しかしその死とは、けっして無為な瞑想ではない。三島その人が示したように、全開の行動によって成就する死なのである。そのようにしてベジャールも今、精力的な舞台づくりそのもので、真っ向から死と相対している。